INNOVATOR'S GARAGE

Garage Nagoya Topics

ナゴヤ イノベーターズ ガレージの活動やイベント、そこで活躍する人々を紹介するコーナーです。

1. 実践的な課題解決学習の場を提供

ナゴヤ イノベーターズ ガレージでは、日本の未来を担う若者の人材育成を目的に、高校生を対象とするインターンシップ（就業体験）を開始した。

今回は、愛知県江南市の滝高等学校よりビジネス部の6名が3日間のインターンシップに参加した。

スケジュール	
DAY1 (7/21)	・インタビュー（スタッフ／事業会社） ・ディスカッション
DAY2 (8/2)	・インタビュー（スタートアップ） ・ミニセミナー「企画するとは」 ・発表資料作成
DAY3 (8/5)	・発表会

参加者は2チームに分かれ、「異業種交流を活性化するためにナゴヤ イノベーターズ ガレージに必要とされる斬新な仕掛けとは」という課題に対して、チームごとに解決策をまとめ、最終日に発表を行った。参加者は、これまで学んできた知識に加え、インタビューやブレインストーミングなどを通して、実践的な課題解決学習に取り組んだ。

2. インタビューによる仮説検証

ナゴヤ イノベーターズ ガレージでは、事業会社やスタートアップ企業などが活動している。参加者は、運営スタッフに加え、事業会社の新規事業担当者や起業家へのインタビューにより、自ら立てた仮説を検証し、現場の生の声を聴くことの重要性を体感した。

3. 高校生によるアイデア提案

3日間の学びの集大成として、各チームの発表を行った。幼少期の起業家英才育成プログラムや実証実験を取り入れた新たな企業の参画、SNSやホームページを用いた集客案など複数のアイデアが登場した。創造性豊かな高校生との共創を通じ、スタッフも新たな気づきや発見が得られた。参加者からは、「タイムマネジメントやフレームワークの重要性がわかった」「文章力、伝える力が備わった」などの感想があった。

多様な人材が集まることでイノベーションが生まれる。今後も産学連携を深めるとともにアントレプレナーシップの醸成を図っていく。

Report 2

2021.9.7 Tue.

フューチャーコンパス 第28回 講演会

参加者：オンライン 約170名

演題「DX for Beyond the Border ～自分たちの未来は自分たちで創る～」

【講 師】フィールド・フロー（株）　代表取締役　渋谷 健 氏

プロフィール／外資系コンサルティングファーム、国内大手企業経営戦略室を経て、2014年にフィールド・フロー（株）を設立。「事業に脚本を」をコンセプトにオープン・イノベーション実践活動を全国で展開。経済産業省・農林水産省などの政策事業、北九州市・宮崎県・長野県などの地方創生事業、大企業・金融・ベンチャーなどの民間事業にプロの事業プロデューサー・ファシリテーターとして関わる。

【講演要旨】

1. そもそもDX（デジタルトランスフォーメーション）とは何か？

DXとは「変容」である。世の中はカーボンニュートラルなど、持続可能な社会への変容が不可欠であり、産業構造も持続可能な経済モデルへの変化が必要とされている。変化した社会構造で生き残り、持続可能な社会へたどり着くためには、「ヒト」「組織」「事業」のあり方を競争型の従来構造から共創型の新たな構造に変えていく必要がある。

DXにおいて、現状の延長線でデジタルツールを活用する作業効率化や延命治療は誤った認識である。本質的なDXとは原点に立ち返り、デジタルの潮流の中で真に求められている社会価値を探究＝デザインし、自ら変容＝トランスフォーメーションしていくことにある。デジタル技術の活用はその前提に過ぎない。

社会価値の軸は「カネ」から「ヒト」へと変わる。「カネ」は必要だが、目的を達成するための手段でしかない。「ヒト」が豊かで幸せであることがより重要になる。それに伴い、信頼には専門性よりも透明性が、行動には規模よりも俊敏性が、成果には競争優位よりも全体性（社会の価値循環）が必要になる。結果として社会全体で価値を創出するオーケストレーション※1が実現され、従来構造の限界を突破することが可能になる。

※1：オーケストレーション：オーケストラがハーモニーを創るように領域を超えて互いに協力し、新たな価値を共創すること。

2. なぜ、いまDXが必要なのか？

私たちにはどれだけの時間が残されていて、未来に何を残せるのだろうか。人口減少、気候危機、災害など想定外で先の読めないことが当たり前に起きている。向き合うべきは、社会を継承すること。

日本企業はイノベーションへの取り組みが遅れ、競争力は低下を続けている。もはや先進国として扱ってもらえる状態ではなく、昭和の経済成長による成功体験に強烈にアンカリング※2されている。また、経営にとって重要なノウハウや知見を外部依存する傾向があり、実践ノウハウが霧散し、業界および地域の衰退が起きている。今変容しなければ手遅れになる。

※2：アンカリング：物事の判断や行動に影響を与えている先入観、固定観念・思い込み。

3. いかにDXに取り組むべきなのか？

キーポイントはトラスト（信用・信頼）である。我々は産業革命により物理的な距離（モビリティ）、時間的な手間（情報技術）の壁を越えてきた。次に求められるのは心理的な壁（トラスト）を越えること。トラストを扱い社会的な価値を創出するため、「ヒト」の内面から変容することが必要である。それは世界に必要なのか、そこに無条件の信頼はあるかといった問いを立て、物事の本質に気づく力を磨き続けることが大切である。

4. DXをどこから始めるか？

DXにおいて最も重要なことは「ヒト」からのアンロックである。固定観念・従来構造による囚われを断ち切り、必要な共通言語・共通認識を再度築き直し、「自分の未来は自分でつくる」という主体性を持って、会社などの枠を超えて、社会価値に向けた実践に取り組み続けることである。若手は10年後・20年後の担い手として、40代前半までの中堅は今すぐ動ける実践者として、40代後半以上は未来を次世代に託す器として、組織や社会を変える原動力へと変容することが求められる。そのために必要なことは実に単純である。兎にも角にも新しい可能性に一歩でも踏み出していくこと。ぜひ今回の機会をアンロックのきっかけとしていただきたい。